

総合防災訓練に参加した学生の学習意欲と学び

政時和美* 村田節子* 松井聡子* 中井裕子*

Learning Motivation and Learning of Students Participated in Comprehensive Disasters Training

Kazumi MASATOKI Setsuko MURATA Satoko MATSUI Yuko NAKAI

Abstract

The purposes of this study are to clarify the ambitions and learning of nursing students regarding disasters and emergencies as well as to look for issues in disaster nursing education by analyzing questionnaires answered by nursing students who participated in expert training in disasters such as firefighters, rescue teams and Self-Defense Force members (hereinafter “comprehensive disaster prevention training”).

A qualitative analysis was made of the comments section of post-training questionnaires answered by 13 students who participated in comprehensive disaster prevention training. Analysis discovered opinions such as “I want to learn disaster nursing” and “I want to learn about DMAT,” etc. These suggest an increase in motivation to study. In addition, an analysis was made of the comments section of the questionnaires using the Krippendorff method in order to clarify what the nursing students learned. A category was created for each of the nouns or other similar phrases that were used three or more times in the comments, and this made it possible to divide the contents of the comments sections into the following five categories: “the psychology of victims,” “cooperation with other occupations,” “appropriate triage abilities,” “nurse communication abilities” and “awareness of necessity of learning of disaster nursing.” Nursing students in this university have not taken courses or seminars on disaster nursing, but it is thought that the students were able to deepen their own personal awareness of disaster nursing.

Key words: comprehensive disaster prevention training, disaster nursing, learning motivation, learning

要 旨

本研究の目的は、消防やレスキュー隊・自衛隊などの災害における専門家の訓練（以下、総合防災訓練）に参加した看護学生のアンケートを分析し、看護学生の災害および救急に関する学習意欲や学びの内容を明らかにし、災害看護の教育の課題を探索することである。

総合防災訓練に参加した看護学生 13 名を対象とし、総合防災訓練後に実施したアンケートの自由記載を質的分析した。分析の結果、【災害看護を学びたい】【DMAT について学びたい】などの意見があり学習意欲の向上が伺えた。また看護学生の学びを明らかにするため、自由記載をクリッペンドルフ分析した。自由記載に 3 回以上使用されている名詞において類似しているものをカテゴリー化すると、【被災者の心理】【多職種連携】【適切なトリアージ能力】【看護師のコミュニケーション能力】【災害看護の学習の必要性の認識】の 5 カテゴリーに分類できた。本学の看護学生は災害看護の講義や演習は受けていないが、自己の災害看護に関する認識を深めることができたと考えられる。

キーワード：総合防災訓練、災害看護、学習意欲、学び

* 福岡県立大学看護学部
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒 825-8585 福岡県田川市伊田 4395 番地
福岡県立大学看護学部臨床看護学系
政時和美
E-mail: masatoki@fukuoka-pu.ac.jp

緒 言

近年では、自然災害や人的災害など多くの犠牲者が生じる震災が起きている。災害時は多発する重篤救急患者の看護をライフラインの確保が整っていない被災地で行わなければならない。また、被災地だけでなくその隣接した地域や遠方の地域でも、災害状況の情報を共有し早急な人命救助・生活支援が看護師にも求められている。厚生労働省では、災害時における医療体制の充実強化で医療関係者に対し災害医療に関する研究、訓練の実施を努めるよう提示されている。地域災害拠点病院や基幹災害拠点病院に指定されている医療機関ではすでに防災訓練を実施している。

厚生労働省だけでなく、文部科学省でも2008年に改正された看護基礎教育課程の中で、臨床実践の能力向上のため「看護の統合と実践」が統合分野として新たに設けられた。この「看護の統合と実践」の中で災害直後から支援できる看護の基礎的知識について理解することなど位置づけられた。しかし、看護系大学及び短期大学における災害看護教育の実態研究では、災害看護の講義や演習を行っている施設は30.0%であり、そのうち必須科目としている施設は37.5%との報告がされていた¹⁾。このことから、半数以上の看護系大学及び短大の看護学生は災害看護教育をうけていないと予測できる。このほかの研究でも基礎看護教育で災害看護学を科目として取り組みをしている看護系大学は少ないと言われている²⁾。

看護系大学の本学でも救命救急に関する講義や演習はあるが、カリキュラムの中に災害に特化した講義や演習は行っておらず、災害看護の概念や災害時の看護専門職の役割と機能など学生の教育が充分ではない。

このような現状を受け、A地区における消防やレスキュー隊、自衛隊、DMATなどの各専門家の防災訓練（以下、総合防災訓練）に本学看護学生の参加を認められる機会を得られた。この参加経験を活かし学生の災害および救急看護に対する学習意欲や災害看護における学びを明確にするため、質的データを探索する。

方 法

1. 研究目的

総合防災訓練に参加した看護学生が参加によって

災害および救急看護に関する学習意欲や学びの内容を明らかにし、災害看護の教育の課題を探索すること。

2. 用語の定義

1) 災害

災害対策基本法では、「暴風、竜巻、豪雨、豪雪、洪水、崖崩れ、土石流、高潮、地震、津波、噴火、地滑りその他の異常な自然現象又は大規模な火事若しくは爆発その他その及ぼす被害の程度においてこれらの類する政令で定める原因により生ずる被害という」と定義している。本研究でもこのように定義する。

2) 防災

災害対策基本法では、「災害を未然に防止し、災害が発生した場合における被害の拡大を防ぎ、及び災害の復旧を図ること」と定義している。本研究でもこのように定義する。

3) 災害看護

日本災害看護学会では、「災害に関する看護独自の知識や技術を体系的にかつ柔軟に用いるとともに、他の専門分野と協力して、災害の及ぼす生命や健康生活への被害を極力少なくするための活動を展開すること」と定義している。本研究でもこのように定義する。

3. 研究対象

対象は研究者が所属する看護系大学の看護学生で、A地区で行われた総合防災訓練に参加した13名のうち本研究の同意を得られた12名である。

4. 研究期間

平成27年5月～平成28年5月

5. データ収集

研究者が作成した用紙を訓練後に配布した。質問用紙には研究対象者の属性と「総合防災訓練での気づきや学び」に関する自由回答を求めた。自由回答に関する字数制限はなく、無回答でもよい旨を質問用紙に記載した。

6. 分析方法

質的データである自由記述を量的に探索するために、クリップドルフの技法を用いて分析した。また、質的に探索するために、研究者間で何度も話し合い意味の分かる文節ごとに分け、その意味内容が示唆する内容をコードとし、類似した内容をまとめた。分析の妥当性を確保するため、質的記述研究に精通した研究者の助言を得た。本研究では以下①～

④の手順で実施した。

- ① 学生 12 名分の自由回答欄に記述された内容を「名詞」について出現頻度を求めた。
- ② 研究者間で話し合った結果、出現頻度の多い名詞特に 3 回以上使用している名詞に着目しながら、研究者間で何度も話し合い意味の分かる文節ごとに分けた。
- ③ 分けた文節の意味内容をコードとし、類似した内容をまとめた。得られた結果を類似している単語ごとに、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。
- ④ 意欲を示す特徴的な名詞と連動する文脈を探索した。

7. A 地区総合防災訓練内容

1) 発災種別：地震風水害その他の特殊火災

2) 災害状況：A 地区においてマグニチュード 7.2（震度 5 強）の地震が発生。この地震により河川堤防道路から少年野球チームの子供たちを乗せたマイクロバスが河川敷に横転、多数の負傷者が発生している。また、ビル倒壊により要救助者が発生した。さらに、倒壊家屋に逃げ遅れた者がいる状況。

3) 総合防災訓練時間及び事前学習内容

総合防災訓練時間は 9：30～12：00 の間で実施され、訓練所要時間は約 2 時間 30 分であった。各専門機関との事前準備や打ち合わせは合同で 3 回、個別で 2 回実施した。学生は、事前準備や打ち合わせには参加していない。学生には総合防災訓練実施 1 週間前に実施内容を伝え、総合防災訓練当日にシミュレーションを実施した。

4) 総合防災訓練プログラム

平成 27 年 11 月の 1 日間 A 地区で以下①～⑤の内容を実施した。学生は、①～⑤を見学し、③～④は実践に参加した。具体的な総合防災訓練概要は表 1 のように実施した。

- ①初動対応訓練
- ②風水害対応訓練
- ③地震災害対応訓練
- ④誘導救護・搬送訓練
- ⑤ライフライン応急復旧訓練

5) 学生参加内容

学生は負傷者の避難誘導と模擬負傷者として参加した。マイクロバス転落現場からの負傷者救出訓練では学生全員が参加した。地震により河川に転落横

転したマイクロバスの負傷者を救急隊トリアージ後、軽症者を徒歩で消防隊と一緒に救護所に移動した。移動後、負傷者のトリアージタグに氏名など必要事項を記述した。

倒壊ビルからの負傷者救出訓練では 6 名の学生が参加した。倒壊ビルに閉じ込められた模擬負傷者を学生 2 名が実施し、1 名は視覚障害のある状況を模擬するためアイマスクを使用した。もう 1 名は胸部擦過傷がある状況を模擬するため擦過傷のシールを使用した。この 2 名を警察と消防、自衛隊が救出し、学生 4 名が救護所に誘導した。

倒壊家屋からの負傷者救出及び消火訓練では 2 名学生が参加した。倒壊家屋に閉じ込められた模擬負傷者を学生 2 名が実施し、1 名は頭部外傷のある状況を模擬するため傷シールを使用した。もう 1 名は胸部切傷がある状況を模擬するため切傷シールを使用した。救出や誘導は自衛隊が実施した。学生の安全や健康の配慮、訓練指示や支援を同行した研究者が実施した。

8. 倫理的配慮

- 1) 研究者が所属する施設の倫理委員会の承認を得て研究を開始した。
- 2) 研究対象者の所属する施設の学部長に本研究の趣旨を文章と口頭で説明し、同意を得た。
- 3) 研究対象者に研究者が説明文章とアンケート用紙を配布し、配布物を用いて総合防災訓練前に下記の内容を説明し、総合防災訓練後アンケートと同意書を得た。

(1) 研究への参加の任意性について

研究への参加は任意であり、学生の自由な意思を尊重する。研究に参加しないことにより、今後の講義や成績で不利益な対応を受けることはないことを文章にて保障した。また、参加に同意した場合でも、いつでも不利益を受けることなく同意を撤回できることも文章にて保障した。ただし、同意を撤回したときすでに研究成果が論文などで公表されていた場合や結果が完全に匿名化されて個人が特定できない場合などには、結果を廃棄できないことも文章に付け加えた。

(2) 個人情報の取り扱いについて

本研究で実施したアンケート用紙は、研究期間まで外部に漏れないよう鍵のかかる BOX に入れて厳重に管理を行う。また、個人情報管理者が回答紙に識別番号を割り付けて匿名化を行い、データ等の取

表1 総合防災訓練概要

訓練分類	訓練種目	実施機関
初動対応訓練	緊急地震速報受信時対応行動訓練	参加者全員
	災害対策本部設置訓練	A 地区役場
	エリアメール及び災害発生メール配信訓練	A 地区役場・消防
	被害状況調査及び情報収集・伝達訓練	A 地区役場・国土交通省・警察・県土整備事務所・陸上自衛隊
	現場指揮本部設置訓練	警察・電信電話会社・消防
	A 地区防災対策協議会集結訓練	A 地区防災対策協議会
	消防相互応援協定に基づく応援要請訓練	警察・消防
風水害対応訓練	陸上自衛隊災害派遣要請訓練	A 地区役場
	交通規制・交通整理訓練	警察・県土整備事務所
	応援要請による集結訓練	陸上自衛隊・消防航空隊・消防
地震災害対応訓練	重傷者救出・緊急搬送訓練	B 地区航空隊・救助隊
	交通規制・交通整理訓練	警察・県土整備事務所
	応援要請による集結訓練	陸上自衛隊・C 地区救助隊・D 地区救急隊・DE 地区救急隊・県警機動隊
	マイクロバス転落現場からの負傷者救出訓練	D 地区救急隊・県土整備事務所・電力会社・消防・学生
	倒壊ビルからの負傷者救出訓練	DE 地区救急隊・県警機動隊・F 地区救急隊・DMAT・消防・学生
誘導・救護・搬送訓練	倒壊家屋からの負傷者救出及び消火訓練	A 地区防災対策協会・D 地区救急・警察・陸上自衛隊・消防・学生
	応急救護所設置・運営訓練	
	応援要請による集結訓練	A 地区防災対策協会・
	トリアージ及び応急手当訓練	D 地区救急隊・DE 地区救急隊・
	住民による負傷者誘導訓練	A 病院 Dr ヘリ・B 病院 Dr ヘリ・医師会・DMAT・学生
ライフライン 応急復旧訓練	医療機関への負傷者搬送訓練	
	非常食供給訓練	陸上自衛隊・食進会
	通信施設応急対策訓練	電信電話会社
	ガス施設応急復旧訓練	A 地区防災協会
	応急電力供給訓練	電力会社
	断水情報伝達及び給水訓練	A 地区役場・消防
	道路状況確認訓練	警察・県土整備事務所

り扱いには番号を用いる。研究対象者と番号とを結びつけるものは一切なく、個人を特定できないように取り扱う。

結果

1. 対象者の属性

参加者 13 名のうち 12 名より同意を得た（回収率 92.31%）。有効回答率は 100%であった。参加者は 4 年生が最も多く 8 名（66.67%）、次に 3 年生 4 名（33.33%）、1 年生 2 年生に参加者はいなかった。性別は男 2 名（16.67%）女 10 名（83.33%）であった。学生で防災訓練の経験がある者は 1 名（8.33%）ない者は 11 名（91.67%）であった。

想像していた訓練と実際の違いを感じていた者は 9 名（75.00%）ない者は 2 名（16.67%）不明が 1 名（8.33%）であった（表 2）。

2. 災害看護に関する学び

1) 出現頻度

アンケートにおける名詞を研究者が抽出し、出現回数が 3 回以上の 70 語を抽出した。出現頻度を表 3 に示す。最も多い名詞は「連携」の 23 回であった。次に「緊急」「実際」「DMAT」「技術」「行動」「学生」「考え」「学び」「看護」「災害時」「トリアージ」「大規模」「困難」「知識不足」「救出」「災害訓練」「看護師」「重要」「職種」「コミュニケーション能力」「災害」「出来ない」「速さ」の順であった。出現回数 9 回以下 3 回以上は「声掛け」「学習」「心」「災害看護」「学びたい」「医療」「応急手当」「恐怖」「言葉かけ」「混乱」「重症」「多職種」「被災者」「緊張感」「体験」「不安」「方法」「観察方法」「訓練」「心の問題」「消防」「大切」「多さ」「機関」「苦しみ」「警察」「自衛隊」「心理状況」「判断」「医師」「救急看護」「救助活動」「重機」「重傷者」「ド

表2 アンケート結果 (対象者の属性)

項目	人数	
学年	1年生	0 (0.00%)
	2年生	0 (0.00%)
	3年生	4 (33.33%)
	4年生	8 (66.67%)
性別	男	2 (16.67%)
	女	10 (83.33%)
防災訓練の経験に関して	あり	1 (8.33%)
	なし	11 (91.67%)
想像していた訓練と実際の訓練の違いを感じたか	あり	9 (75.00%)
	なし	2 (16.67%)
	不明	1 (8.33%)

表3 名詞の出現頻度

名詞	回数	名詞	回数	名詞	回数
連携	23	学習	9	自衛隊	5
緊急	21	心	9	心理状況	5
実際	21	災害看護	9	判断	5
DMAT	19	学び(たい)	8	医師	5
技術	18	医療	8	救急看護	4
行動	18	応急手当	8	救助活動	4
学生	17	恐怖	8	重機	4
考え	17	言葉かけ	8	重傷者	4
学び	17	混乱	8	ドクターヘリ	4
看護	15	重症	8	安全	4
災害時	14	多職種	8	安全確保	3
トリアージ	14	被災者	7	音	3
大規模	13	緊張感	7	ガス会社	3
困難	13	体験	7	看護師の能力	3
知識不足	13	不安	7	聞き取り	3
救出	12	方法	6	救急隊	3
災害訓練	12	観察方法	6	軽症者	3
看護師	11	訓練	6	弱者	3
重要	11	心の問題	6	心理	3
職種	11	消防	6	適切	3
コミュニケーション能力	10	大切	5	電気会社	3
災害	10	多さ	5	役場	3
出来ない	10	機関	5	(分かりやすい)声掛け	3
速さ	10	苦しみ	5		
声掛け	9	警察	5		

クターヘリ」「安全」「安全確保」「音」「ガス会社」「看護師の能力」「聞き取り」「救急隊」「軽症者」「弱者」「心理」「適切」「電気会社」「役場」「分かりやすい声掛け」の順であった。

2) カテゴリー化

出現頻度の多い名詞特に3回以上使用している名詞に着目し、研究者間で何度も話し合い意味の分かる文節ごとに分けた。文節の意味内容をコードとし、類似した内容をまとめた。得られた結果を類似している内容ごとに、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。サブカテゴリー、カテゴリー化したものを表4に示す。《 》はサブカテゴリー [] はカテゴリーを示す。[被災者の心理][多職種連携][適切なトリアージ能力][看護師のコミュニケー

ション能力][災害看護の学習の必要性の認識]の5つのカテゴリーと14のサブカテゴリーが抽出された。

(1) [被災者の心理]

「緊張感」「不安」「心理状況」「心理」「混乱」「心の問題」「恐怖」「心」「苦しみ」など《災害者の心理状態》や、救助されるとき「音」が大きくこの「音」が「不安」や「混乱」を生じやすいなどの《被災者の心理状態に影響を与える要因》で構成されていた。

(2) [多職種連携]

「大規模」「災害時」「連携」「救出活動」などの《連携の目的》や「救急隊」「警察」「自衛隊」などの《連携している職種》、「役場」「機関」「消防」な

表4 アンケート自由記載欄に用いられた名詞のカテゴリー化

カテゴリー	サブカテゴリー	着目した名詞
被災者の心理 (72)	被災者の心理状態 (58)	心 (9)、恐怖 (8)、混乱 (8)、不安 (7)、緊張感 (7)、心の問題 (6)、心理状況 (5)、苦しみ (5)、心理 (3)
	被災者の心理状態に影響を与える要因 (14)	被災者 (8)、音 (3)、弱者 (3)
多職種連携 (167)	連携の目的 (54)	連携 (23)、災害時 (14)、大規模 (13)、救助活動 (4)
	連携している職種 (41)	職種 (11)、多職種 (8)、多さ (5)、自衛隊 (5)、警察 (5)、医師 (4)、救急隊 (3)
	連携している機関 (39)	DMAT (19)、消防 (6)、機関 (5)、役場 (3)、ガス会社 (3)、電気会社 (3)
	連携に必要な機材 (8)	重機 (4)、ドクターヘリ (4)
	連携に必要な技術 (25)	救出 (12)、速さ (10)、安全 (3)
適切なトリアージ能力 (80)	トリアージの対象 (29)	トリアージ (14)、重症 (8)、重症者 (4)、軽症者 (3)
	トリアージ能力 (51)	行動 (18)、技術 (18)、方法 (7)、判断 (5)、適切 (3)
看護師のコミュニケーション能力 (66)	コミュニケーションの主体 (34)	看護 (15)、看護師 (11)、医療 (8)
	具体的なコミュニケーション技術 (32)	コミュニケーション能力 (10)、言葉かけ (8)、大切 (5)、聞き取り (3)、看護師の能力 (3)、分かりやすい声かけ (3)
災害看護の学習の必要性の認識 (82)	知識不足への気づき (40)	学生 (17)、知識不足 (13)、できない (10)
	学生の学習課題の発見 (42)	学び (17)、災害看護 (9)、学習 (9)、救急看護 (4)、安全確保 (3)

表5 「学びたい」と記述された語の文脈

先行文脈	キーワード
〇〇大学では、災害時の看護について科目や技術がありませんと思うので、追加してほしいと思います。そこで 応急手当の技術 について	学びたい。
急変が起きたとき、自分たちができる 応急手当の技術 を身につけるよう	学びたい と感じた。
災害時における 救急看護 をもっと	学びたい と思った。
今まで救急看護を学習したが、実際をみると学習が不足しており学ぶ必要性を理解した。 救急看護 を改めて	学びたい と思った。
今回の訓練を見て災害時の実際の動きや 災害看護 の実際を	学びたい と思った。
実際に災害のとき動くのは医療者なので、しっかり 災害看護 について	学びたい と思った。
DMAT やトリアージを現場の看護師がどのように動いているのが分かった。自分達も住民の役に立てるよう DMAT やトリアージ を基礎から	学びたい と思う。
トリアージの方法やDMATの動きなど、もともと興味があったので、学生のときに トリアージ、DMAT について	学びたい と感じた。
災害時の技術は医師だけでなく看護師も必要と思う。 災害時の技術 を	学びたい し見たかった。
実際の訓練をみて、普段の講義にも ドクターヘリの見学 をし、もっと多くを	学びたい。

どの《連携の機関》、「重機」「ドクターヘリ」の《連携に必要な機材》、「救出」「安全」などの《連携に必要な技術》で構成されていた。

(3) [適切なトリアージ能力]

「トリアージ」「重症」「重症者」「軽症者」など《トリアージの対象》に関する用語や「適切」「判断」「方法」「行動」「技術」など《トリアージ能力》で構成されていた。

(4) [看護師のコミュニケーション能力]

「医療」「看護」「看護師」など《コミュニケーションの主体》に関する用語と「大切」「言葉かけ」「聞き取り」「看護師の能力」「コミュニケーション能力」「分かりやすい声かけ」など《具体的なコ

ミュニケーション技術》に関する用語で構成されていた。

(5) [災害看護の学習の必要性の認識]

「知識不足」「できない」「学生」など「学生」の《知識不足への気づき》や、「安全確保」「学び」「学習」など《学生の学習課題の発見》で構成されていた。

3. 災害看護に関する学習意欲

アンケートの記述で「学びたい」という名詞が9回出現した。「学びたい」という名詞の使用があった文脈については表5に示す。この結果「応急手当の技術」が2、「救急看護」が2、「災害看護」が2、「トリアージ・DMAT」が2、「災害時の技術」

が1、「ドクターヘリの見学」が1であった。

考 察

1. 災害看護に関する学び

1) 出現頻度

名詞の出現頻度は「連携」が最も多かった。これは、各職種の「連携」した活動を見学し、体験したことを記述したと考える。そのため、「多職種」「職種」「医師」「消防」「DMAT」「役場」「ガス会社」「電気会社」「救急隊」「警察」「自衛隊」などの職種に関する名詞の記述も多かったと考える。2番目に多かった「緊急」は、訓練の性質から多く記述した名詞だと考える。3番目に多かった「実際」は、本研究の対象者が防災訓練の経験のない者が9名(75.0%)であった。そのため、「実際」に県道を封鎖し、トリアージマットの設置などを見たため「実際」という名詞の記述が多かったと考える。4番目に多かった「DMAT」は、看護師が直接関与する内容であったため、「DMAT」という名詞の記述が多かったと考える。5番目に多かった「技術」は、訓練に携わった各専門職の「技術」や看護師の「技術」など、「技術」に関心が多かったため「技術」という名詞の記述が多かったと考える。6番目に多かった「行動」は、専門職の「行動」を観察し、学生自身の「行動」振り返りを行った結果、「行動」という名詞の記述が多かったと考える。7番目に多かった「学生」は、学生自身のことであり、自己の内容を記述しているため「学生」という名詞の記述が多かったと考える。8番目に多かった「考え」や9番目に多かった「学び」、10番目に多かった「看護」は、総合防災訓練が学生の「考え」や「学び」、「看護」に結びついた結果、「考え」や「学び」、「看護」という名詞の記述が多かったと考える。

2) カテゴリー化

出現頻度3回以上の名詞に着目し、類似した語をカテゴリー化し【被災者の心理】【多職種連携】【適切なトリアージ能力】【看護師のコミュニケーション能力】【災害看護の学習の必要性の気づき】の5つのカテゴリーと14のサブカテゴリーを抽出することができた。【被災者の心理】のカテゴリーでは、模擬負傷者役の体験や救出場面の見学で救出された被災者は、安堵や安心だけでないことを学んだと考える。この学びの中には先行研究と異なり³⁾、救出＝安堵だけではないという救出者の救出後における

複雑な精神状態を学んだと考える。これは、実際に救出時にでる「音」の「恐怖」や倒壊など模擬負傷者役を通し、救出や誘導時の「苦しみ」を経験したことが考えられる。

【多職種連携】のカテゴリーでは、実際の災害時に活動する「多職種」が「DMAT」などの医療職だけでなく、災害状況の確認に「警察」や被災地の「役場」やその地域を管轄している「ガス会社」「電気会社」などの医療職以外の「職種」との「連携」を体験しその学びを得たと考える。これは、先行研究でも報告されている⁴⁾ように、経験によってその必要性が本研究でも同様の学びとなったと考える。

【適切なトリアージ能力】のカテゴリーでは、「トリアージ」の実際を見学し、「適切」に「判断」する「技術」が必要であることを学んだ。「トリアージ」に関する気づきや学びも、先行研究で報告されているように、本学の学生もその対象者や能力に必要な適切な「判断」ができるための「技術」や迅速な「行動」が求められていることを学んでいることが分かった。しかし、トリアージプロセスを学んだかは今回の研究では明らかにはできなかった。一般に災害急性期には緊急度・重症度ともに高い外傷患者が多く存在し、外傷初期看護の実践が求められていると言われている⁵⁾。このことから、総合防災訓練に参加するだけでなく、意味づけなど学習支援の必要性があると考えられる。

【看護師のコミュニケーション能力】のカテゴリーでは、学生全員が参加した転落横転したマイクロバスの負傷者が小学生であったため、「言葉かけ」や「聞き取り」が難しく、実際に学生が記述したトリアージタグに氏名のミスもあった。このことの体験などから学んだ結果と考える。しかし、看護のコミュニケーション能力は災害時「言葉かけ」や「聞き取り」だけでなく、情報把握や情報伝達などにも必要である。これらの気づきや学びに関する記載はなく、その必要性を理解できたかは不明であった。

【災害看護の学習の必要性の認識】のカテゴリーでは、災害に特化した講義や演習を行っていない中で初めて参加した訓練を通し、今の学生自身を振り返り「知識不足」や「できない」など、自己の学習課題を学び得たことが考えられる。しかし、具体的にどのような学習などが不足しているかの記載はなかったことから、災害時に活動できる看護職の教

育には、災害時に伴う健康問題の特徴や多職種との連携など、組織的な動きや働きや体制づくりの必要性を学ぶ教育が必要とされている⁶⁾。本研究では防災訓練などに参加した学生の学びに関する先行文献と同様、多職種と接し体験することで災害看護教育に必要な学びの一部を得たと考える。しかし、経験し学ぶことはできていたが、災害看護に必要な倫理問題や初期行動以外の看護の学びは得られていないことが分かった。知ることは実践的な知識と理論的な知識の両方が含まれていると言われている⁷⁾。本校の学生は災害看護に経験的な知識を得ることができていても、理論的な知識を意味付ける教育が得られたかは本研究では明らかになっていない。そのため、学生の学びを意味付ける理論的な教育が必要である。

2. 災害看護に関する学習意欲

「学びたい」の文脈では、「応急手当の技術」「災害時の技術」など技術に関する学習意欲は、実際的な多職種や看護師の技術で救出される体験や経験をしたことによるものと考えられる。

「災害看護」「トリアージ・DMAT」など災害基礎教育に関する学習意欲は、実際的な多職種と連携するときに必要な基礎知識や能力などの必要性を体験や経験をしたことによるものと考えられる。

「ドクターヘリの見学」は、災害看護に興味をもち「ドクターヘリ」などプレホスピタルでの看護の学習意欲を得たと考える。

災害看護を学ぶ動機づけを訓練参加により高めることができると言われているが^{8, 9)}、本研究対象者も先行研究同様に総合防災訓練により学習意欲を得たと考える。

結 論

1. 災害看護に関する学びでは、【被災者の心理】【多職種連携】【適切なトリアージ能力】【看護師のコミュニケーション能力】【災害看護の学習の必要性の認識】の5つのカテゴリーと14のサブカテゴリーが抽出された。

2. 学生の災害看護に対する学習意欲では【災害看護を学びたい】【DMATについて学びたい】などの意見があり学習意欲の向上が伺えた。

3. 総合防災訓練に参加し、災害時の連携や災害看護について学ぶことができた一方、理論的な意味づけが理解されておらず、理論的な学習支援が必要で

あることが明らかになった。

研究の限界

本研究では、研究対象者数が少なくサンプル数が少なかった。このサンプル数では信憑性が不足していることも否めず、一般化には限界がある。今後、質問紙の内容を考慮するなど課題を追究する。

謝 辞

本学の学生に総合防災訓練に参加させて頂く機会をいただきましたA地区関係者の皆様、本研究にご協力くださいました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 長澤利枝, 松尾ひとみ, 深江久代他. 看護系大学及び短期大学における災害看護教育の実態. 静岡県立大学教員特別研究報告書 2007; 1-11.
- 2) 松本幸子, 高比良祥子, 片穂野邦子他. 基礎看護教育における「災害看護」構築に関する研究. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 2006; 7: 53-60.
- 3) 丹下幸子, 鈴江毅. 岡山市平井学区防災訓練への学生参加による災害教育の試み ネットワーク・地域住民との連携と地域貢献, 人材育成のありかた. 山陽論叢 2013; 20: 25-35.
- 4) 山田良子, 大野澄子. 病院の災害訓練に参加した看護学生の学びと課題 救護班役・マスコミ役・撮影係で参加した看護学生の学びから考える. 日本看護学会論文集 看護教育 2010; 40: 266-268.
- 5) 成瀬かおる, 高橋順子, 中山富子他. 総合防災訓練に負傷者役で参加した看護学生の重症度による学びの違い. 日本看護学会論文集 看護教育 2008; 38: 111-113.
- 6) 澤田由美, 池本ちひろ. 災害看護の授業とその効果. 看護教育 2007; 48(11): 1002-1007.
- 7) M. ポラニー著, 佐藤敬三訳, 伊東俊太郎序. 暗黙知の次元. 東京: 紀伊国屋書店. 1980.
- 8) 村田美代子, 若瀬淳子, 山元恵子. 看護学生の大規模テロ災害訓練模擬負傷者体験からの学び. 共創福祉 2014; 9(1): 17-24.
- 9) 原田秀子, 田中周平, 張替直美. 災害訓練への

参加を通しての看護学生についての学び. 山口
県立大学学術情報 2012; 5: 37-46.

参考文献

- 1) 小原真理子, 酒井明子監修. 災害看護. 第2版
東京: 南山堂出版社. 2012.
- 2) 澤田由美, 古城幸子, 中山亜弓他. 看護系大
学における災害看護教育. 新見公立大学紀要
2015; 36: 21-26.
- 3) 中村有美子, 藤井可苗, 菅野夏子他. 看護学生
の災害看護学履修別防災意識と防災行動の検
討. ヒューマンケア研究学会誌 2013; 5(1):
55-60.
- 4) 大橋幸美, 安藤好枝, 中山奈津紀他. 看護大
学生の災害対策の実態と対応のマニュアルの
ニーズ. 生命健康科学研究所紀要 2012; 9:
25-34.
- 5) 片穂野邦子, 吉田恵理子, 松本幸子他. 災害時
看護管理実習における学生の学習到達度と今後
の課題. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部
紀要 2006; 7: 61-71.

受付 2016. 10. 11

採用 2017. 1. 30

